

## リーザ・フリッチュの手記 (4)

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学院人間文化研究科

(2013年10月1日 受理)

### (承前)

1945年のクリスマスの少し前に国連が、出頭した各人に50キロ入った重い小麦粉の袋と、かなりの量の桃と梨の缶詰を配給してくれました。しかし、本人が出頭しなければなりませんでした。それで母、ティータと私の3人は、古い自動車を改造した、エディおじさんの馬車で配給所まで行きました。各人が申告手続をするので、行列は無数の長さでした。配給品を入手したので、私は母とティータと分かれて、人力車で家に帰りました。それから、長時間ユストスに授乳させました。パパは、頭痛のために寝台に横たわったまま、ユストスの面倒をみていたのです。私の息子は、空腹であったに違いないのに、泣き叫んではいなかったとの事でした。イタリア人の料理人が私たちに小麦粉を焼いてくれました。母はワンポーで沈んでしまったイタリア蒸気船の他の乗組員と一緒に素晴らしい白パンを焼いてくれていました。料理人は台所の2台のパン焼き釜を用いて部屋を温めてくれました。ユストスが湯浴み出来る様です。というのは、私たちの部屋は暖炉を使って暖房しても11℃にしかありませんでした。11℃では寒すぎます、赤ん坊には特にです。

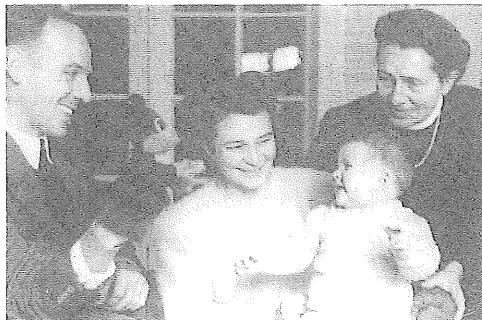


図 28. リーザと夫、母、長男ユストフ

クリスマスは母と一緒に私たちの部屋で祝いました。その後でビルツのところで贅沢な食事をしましたが、私は気分が悪くなりました。ユストスもです。このような素晴らしい食事には慣れていなくなっていたのです。

ドイツの企業はアメリカ人と支那人によって解散させられてしまいました。男の人たちは何らかの方法で稼げるように努力しなければならなかったのです。それでお父さんは当分は三つの仕事をしなければなりませんでした。私たちが小包をドイツに送れる様にするには実に多くの事を処理しなければなりませんでした。しかし、お父さんがある支那人のところで自転車のチェーン工場の仕事を引受けるまでは、悪くなるばかりでした。この支那人は、既に言及した筈だけど、リーゲ夫人の知合いでした。その支那人は運良く乳製品工場を所有していましたので、私たちも時々バターや乳脂を入手できました。この様な

コネが無ければ全く入手不能だったのです。

その間、私はお襦袢じゅばんと洗濯物を洗って貰うために阿媽あまを一人雇って貰いました。彼女はユストスと散歩してくれました。ジャネットが生まれる予定だったからです。ジャネットはユストスと同じ仮病院で1947年6月27日に生まれました。ユストスの時と同じ看護婦たちがいました。助産婦だけが別の人でした。ユストスは静かだったのに、ジャネットは大声で産声うぶこゑを上げました。ジャネットが生まれた時は非常に暑くなっていました。ジャネットには部屋で一番涼しい場所に寝かせていたのですが、毎朝毎晩に大声で泣くのです。それで寝室の窓は閉めておかねばなりませんでした。エディーおじさんの部屋は直ぐ隣の部屋でしたから、目が覚めないようにしなければなりませんでしたから。

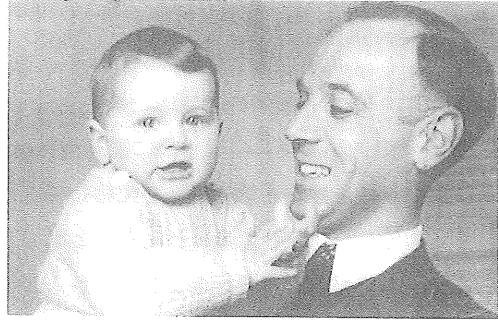


図 29. 夫と長男ユストフ

既に母はその間にフランス租界の住居に移っていました。二人の子供、特にジャネットの泣き叫ぶ声が大きいのので、私たちにとってもほかの住居を探してみる時期になっていました。私たちは上海の郊外に販売価格が4,000米ドルの住居を見つけました。英国旅券を保持していた知人を通してです。この4,000ドルの一部は他人から借りて費用を調達できたのです。この住居は英国人の財産だったので、私たちはこのようにして購入したのです。家主さんはドイツ人には売却したくなかったのですが、この住居に引越しするとジャネットは泣き叫ぶのをやめたのです。費用の一部で家具も購入したのです。というのは、寝台の他には家具を所有していなかったからです。備付の家具の中には水槽もありました。水槽の中は水草で一杯でした。仮に金魚が居たとしても、見えなかった事でしょう。水槽を掃除してみましたが、やはり金魚は一匹もいませんでした。後になってこの水槽から多くの喜びを得ました。金魚の餌は生きたミジンコでしたが、ある支那人女性が毎日玄關まで届けてくれました。時々には彼女に金魚養殖所まで連れて行って貰いました。



図 30. 長女ジャネット

住居は非常に綺麗で、居間兼食堂の他にそれぞれに風呂の付いた寝室が二つありました。更に、バルコニーが二つありました。冬には暖房が困難でした。居間には暖炉が一つしかなかったからです。私たちは食堂を石油ストーブで暖房しました。この住居で阿媽の妹も追加の阿媽として雇いました。この阿媽は住居を掃除し、洗濯の仕事をしてくれました。その頃には使い捨てのお襦袢じゅばんはありませんでした。

たので、お襦袢は洗濯しなければなりませんでした。

住居を購入したのは、賃貸だと月に400米ドルの家賃を払わねばなりませんでしたが、それは不可能だったからです。当時の物価はその様だったのです。

私たちの輸送手段は自転車でした。木炭ガス自動車のバスやタクシーが走っていましたが、私たちは殆ど利用しませんでした。輪タク<sup>65</sup>も出てきました。路面電車もまだ走っていたのでした。

1947年に最初の本国強制送還が始まりました。強制送還される人々の収容所が新設されました。そこには多くのドイツ人が収容されました。ナチス党員や企業の幹部たちが収容されたのです。強制送還船は日本からドイツ人を乗せて到着しましたが、上海で乗船する殆どの人はこの強制収容所からの人たちでした。最初の頃に到着した強制送還船の一隻にエーファ叔母<sup>66</sup>さんとヘリ叔父さんが乗っていました。母は私たちの乗船許可証を入手しました。この機会を利用してエーファおばさんと何年ぶりかの再会をして、ヘリ叔父さんとは初対面をしようとしたのです。二人は1944年のクリスマス直前に結婚していたのです。お父さんはこの会見に行くのに消極的でした。強制送還船が入港してくると、私たちには何の危険もなかったのに、身を潜めていたからです。私たちはナチス党員でもなければ、企業幹部でもなかったからです。お父さんもそうでしたよ。

収入が益々悪化してきました。それで私たちは他の国への入国査証を取得しようとなりました。最初はオーストラリアに申請したのですが、返事もして貰えませんでした。次にアルゼンチンに申請しましたが、お金持ちしか受入れてくれませんでした。私たちはお金がないので駄目でした。サント・ドミンゴにも申請しました。ついに入国査証を獲得できたのはペルーでした。6週間以内と言う条件付きです。お父さんが戦前に既に居住していた事を証明できたからです。今や私たちは住居を売却しようとしたのですが、上海の郊外に所在するので、簡単ではありませんでした。中共軍<sup>67</sup>が益々接近してきていました。お父さんが南京<sup>68</sup>に出国許可を取得しに行った時には、中共軍は間近に迫っていたのです。最後には住居の買手を見つけましたが、2,000米ドルの損を出しました。売却して利益が出ると思っていましたのに。私たちは母のところへ引越しました。その建物の二部屋が空いていたからです。私たちはそこで6～8週間を過ごしました。その建物の地階<sup>69</sup>には女性の歯科医が住んでいました。

私たちは船でリマに行くつもりでしたが、パナマの通過査証が取得できませんでした。1948年にはパナマとドイツは未だ戦争状態にあったからです。色々と奔走し、お父さんが独身時代に同居していたデンマーク人の保証のおかげで米国の通過査証を獲得できました。その際には3時間にわたる尋問を受けました。特に尋問官の興味をそそったのは、なぜ、お父さんがロシアの査証を使用しないのかと言う事でした。お父さんはロシアの査証を使用したかったのだが、それができなかった事を理解してもらうのに長い時間が懸かったのです。

1949年2月4日の出発日が近づいてきました。ペルーへの移住が決まった時から、メキシコに長いあいだ住んでいたドイツ人女性からスペイン語のレッスンを受けました。私たちはアメリカの軍隊輸送船ジェネラル・ゴードン号への乗船許可証を取得しました。出発までに必要書類を入手するのに本当に苦労したのです。米国西岸では海運ストライキの真っ最中でした。私たちの船はストライキ後、最初に出航した船なのです。2月4日の日は早朝から港にいなければなりませんでした。私たちの荷物を税関に持っていく為にです。私たちが通関検査を受けている際に、母とリーゲ夫人は子供たちの面倒を見ていました。荷物1個につき11米ドルの賄賂を払いましたので、私たちの荷物は開けられませんでした。税関検査がやっと終わると、子供たちは、母とリーゲ夫人とともに消えてしまっていたのです。こんなに恐ろしい事が起こっていいのでしょうか。何分か捜してやっと見つかりました。私たちの税関検査がまだまだ続くと思って、母たちは埠頭の上方に行っていたのです。今や上海との決別です。私たちは改札口に向かいました。そこで用紙に出国のスタンプが押され、私たちの寝台番号も押されたのです。担当の支那人は幸運にも私たちの知人でした。と言うのは、タラップを登る前にお父さんと私たちは離されたのです。お父さんは船首のタラップに、私は子供達と一緒に船尾のタラップにです。ところが、旅券も必要書類も総てお父さんが持っていましたので、私は何も持っていませんでした。それで係員は私を乗船させようとはしませんでした。それで私は知人の支那人のところに戻り、事情を話して、彼からスタンプを押した書類を貰ったのです。その様にして、やっと乗船できました。私たちの荷物を運んでくれた苦力たちは、私からお金を貰おうとしたのですが、私はお金も持っていませんでした。一人の苦力はお父さんを捜しに行きました。もう一人の苦力は私のところに残りました。お父さんは見つかったのですが、支那のお金は全く持っていませんでした。岸壁に残っていた母に、苦力たちに代わりにお金を払って貰う事で事態を解決するのに時間が少しかかりました。一人の苦力が母からお金を受取るまでは、もう一人の苦力は私のところに留まりました。元来、7歳までの子供は母親と一緒にいるという決まりでした。男性と女性は分かれて収容されました。しかし、昼寝の時間にそれが大失敗だと分かりました。ユストスは下段の寝台に一人で寝るのを拒否しました。私は上段の寝台でジャネットの横に寝たのです。更に大騒ぎが起きました。私たちは喫水線より下のC甲板に収容されていたのですが、トイレと洗面所はA甲板にありました。ジャネットはこましゃくれた小娘で、おまるのところへ行くだけで、一人で用便できませんでした。ということは、ジャネットが用便する際にはいつも私が彼女を抱きかかえていなければならなかったのです。おまるを片手にユストス<sup>70</sup>の手を引いてA甲板まで上らねばならなかったのです。私はお父さんにこの実情を説明し、ユストスをお父さんの手元に居させる事はできないかと、話しました。お父さんは船の事務長と話をしました。事務長は、お父さんの周囲の船客がそれに反対でなければ黙認してあげる、との事でした。その様にしてうまくいったのです。ユストスはお父さんの周りの船客たちの人気者になっ

たのです。これらの事が総て解決された後に、私たちは上甲板に行きました。母とリーゲ夫人にもう一度別れを告げる為にです。二人は忍耐強く埠頭で待って居てくれたのです。ユストスは泣いて、「お祖母ちゃん、一緒に行こうよ、」と繰り返して叫んでいました。この子には、前週には毎日一緒に居てくれた祖母が、彼から遠く離れてしまう事が理解できなかったのです。15:30頃に船は出港して、私たちの前途不透明な航海が始まったのです。(終)



図 31. リーザ一家、リーザ夫妻と4人の子供とその孫たち

### 訳者後書

リーザの手記の戦後編はまだまだ続くのである。ペルーに入国し、そこで次男と次女が生れる。夫はあるドイツの大企業の海外従業員になり、コロンビアに転勤し、定年となるまで勤務し、その後の年金生活はドイツで過ごすという事になる。日本人には余り関係のない話になるし、筆者も定年となり、当紀要に続編を執筆する権利もなくなるので、本稿の翻訳はこれにて終了とする。

なおリーザは天寿を全うし、2013年7月16日に西南ドイツのリムルガーホーフで逝去し、近隣のノイホーフェンの墓地に葬られた。享年93歳であった。



図 32. リーザ・フリッチュの死亡通知広告

### (註)

- 65 自転車の後部、または側面に客席を取り付けた営業用の三輪自転車。
- 66 リーザの妹。
- 67 毛沢東の率いる中国共産党軍。蒋介石の中国国民党政府軍(国府軍)と武力抗争中。
- 68 当時の支那国家、中華民国の首都。
- 69 英語やドイツ語では1階の事。米語では1階と言う。
- 70 ジャネットの間違いか？

## Die Geschichte von Lisa Fritsch (4)

Hajimu WATANABE

*Graduate School of Science and the Humanities*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, 712-8505, Okayama, Japan*

(Received October 1, 2013)

Nach dem Krieg mußte Lisa Fritsch weiterhin in Shanghai verbleiben. Inzwischen hatte sie dort auch ihr zweites Kind, Tochter Jeannette, bekommen. Unter entsprechend schwierigen Umständen, nach Deutschlands Kriegsniederlage, mußte Lisa mit ihrem Gatten und ihren zwei Kindern noch weitere vier Jahre in Shanghai leben.

Endlich, am 4. Februar 1949 konnte Lisas Familie dann die Reise nach Peru antreten, eine Reise ins Ungewisse. Ihre Familie vergrößerte sich in den nächsten Jahren um zwei weitere Kinder, Sohn Michael und Tochter Sabine.

Ihr bewegtes Leben führte Lisa letztendlich doch wieder in ihre alte Heimat Deutschland zurück, wo sie im hohen Alter am 16. Juli 2013 in Limburgerhof umringt von ihrer großen Familie friedlich verstarb und in Neuhofen ihre Ruhestätte hat.